

須磨寺商店街



須磨寺の門前町として栄えた須磨寺商店街は、昔ながらの風情を残している、今も毎月二十一日、お大師の月例御影供や花見の季節には人ひとと賑わいます。歴史にちなんだ、ゆかりの寿司、そば、菓子の美味しい店が並んでいます。

須磨浦公園

源平合戦の舞台となった園内には、「戦いの浜碑」や平敦盛の供養塔とも伝えられる「敦盛塚」のほか、与謝蕪村句碑、松尾芭蕉蝸牛句碑、正岡子規・高浜虚子師弟句碑など、史蹟が多くあります。春には、3200本が咲き乱れる桜の名所としても有名です。



蕪村句碑

「春の海 終日のたり たりかな」  
与謝蕪村が、須磨の浦で詠んだものといわれています。句碑は重さ約5トンのひょうたん形の「どろかぶり」という仙石でできています

芭蕉蝸牛句碑

「蝸牛 角ふりわけよ 須磨明石」  
江戸時代前期の俳人松尾芭蕉が元禄年間に須磨を訪ね、古くからの摂津と播磨の国境であった界(境)川のほとりで作った句です。



敦盛塚 (神戸市指定有形文化財)

敦盛塚

2月永3年(1184)平敦盛が、期谷次郎重実の平家討ちを討つたため、それによって重実を討つたの塔を建立したといわれています。高さ3.5mもあり、5輪の石段は須磨寺境内にあります。

奥須磨公園

7つの池をめぐる自然地形を利用した公園です。自然の動植物の観察ができ、ホテルや野鳥の観察会などを開催しています。園内には54種のトンボや40種の蝶が生息しています。



園に隣接する多井畑八幡宮は、光仁天皇時代に厄払いした遺跡であると伝えられています。また松風村雨堂は、光孝天皇の怒りにふれ月見山にわび住した行平が、海岸で出会った多井畑村長の娘姉妹を松風と村雨と名づけて愛しましたが、行平が許されて京へもどった後に、娘姉妹が行平の無事を祈って建てた庵の跡だと伝えられています。



SUMA \*花を巡る\* 文学散歩

作家・山本周五郎の「須磨寺附近」を歩く



須磨寺全景図 (大正13年発行)



SUMA

\*花を巡る\* 文学散歩

作家・山本周五郎の「須磨寺附近」を歩く

(モデルコース)

JR須磨駅→須磨寺前商店街→須磨温泉→龍華橋詰「須磨寺附近」文学碑→須磨寺山門→須磨寺本堂→大池(須磨寺公園)→須磨離宮公園→離宮道→松風村雨堂→網敷天満宮→竹中郁歌碑→須磨海岸→JR須磨駅

須磨について

須磨という地名には、二つの由来があります。一つは江戸時代、この地域に板宿・大手・東須磨・西須磨・妙法寺・車・白川・多井畑という八つの村があり、狭い意味での須磨とは西須磨村をさしていました。もう一つは、六甲山系西端の山が海に迫った平地のシミ、しかも近畿の西南のシミ。このシミがなまってるスマとなり、様々な字が当てられたのち、現在の須磨という言葉が定着したとされています。

須磨は、「万葉集」「源氏物語」など多くの古歌に詠まれてきました。源平ゆかりの史蹟もたくさんあり、江戸時代以降、松尾芭蕉を始め多くの文化人がこの地を訪れ、たくさん句碑・歌碑が残されています。その意味で須磨は“文学のまち”と言えます。

発行 神戸市建設局公園砂防部計画課

お問い合わせ/(078) 322-5422

神戸市広報印刷物登録平成16年度第35号広報印刷物規格D類)

作家・山本周五郎と須磨

『樞の木は残った』『赤ひげ』など、武家ものや江戸もので知られる山本周五郎が、須磨に住んでいて元町の出版社に勤め、文壇デビューが「須磨寺附近」という作品だと知っていますか。

山本周五郎は、1903年(M36)6月22日、馬喰や藪の仲買をしていた父・清水逸太郎、母・とくの長男・清水三十六(さとむ)として、山梨県北都留郡初狩村(現在、大月市下初狩)で生まれました。神奈川県横浜の小学校を卒業後夜学に通いながら質屋に奉公し、1923年(T12)の関東大震災をきっかけに、小学校時代の級友桃井達雄の姉・じゅんの婚家先、木村家(神戸市須磨区離宮前町)に下宿し、観光ガイド誌「夜の神戸」社に勤務していました。1926年(T15)木村じゅん宅寄宿の体験をヒントに「須磨寺附近」を文藝春秋に山本周五郎のペンネームで発表し、文壇デビューとなったのです。

山本周五郎は小学校時代、特に親しくしていた友人に村田汎愛、青江一郎、町野敬一郎、桃井達雄の4人がいました。このうち、桃井達雄の長姉(山本周五郎より9歳年長)木村じゅんが「須磨寺附近」の「青木康子」のモデルなのです。じゅんは山本周五郎の少年時代から憧れの的でした。ちなみに主人公の「清三」は山本周五郎の本名「清水三十六」から採ったのは明白です。

この小説のテーマは、康子が清三に須磨寺で問いかけた言葉「あなた、生きている目的が分かりますか」にあるのです。このことは山本周五郎研究で知られる詩人の足立巻一氏が、「周五郎が生涯をかけて探求した主題」と言っていることからも分かります。また、このテーマは山本周五郎にとって永遠のテーマであったことは後の作品群からも推測できるのです。

作品のモデルとなった木村じゅんは、廻りの人々から「須磨寺夫人」と呼ばれていました。一般に「神戸もの」といわれるのは、「須磨寺附近」「陽気な客」「豹」の三編で、それらに登場する女性はすべて「須磨寺夫人」がイメージされているのです。

(参考文献「山本周五郎と須磨」木村久典著)

「須磨寺附近」あらすじ

清三が友人青木の兄嫁・康子が住む月見山の家に寄宿した秋の夜、夕食後三人で月光が照る須磨の浜辺に遊ぶ。浜には波がなく、淡い霧が降りて寂然としていた。三人の息は月の光を含んで白く冷たい。青木は、月見娘になるとこの浜一面に藻潮を焚いて酒の宴を開く習慣があると話した。

ある雨の夕暮れどき、康子は清三を須磨寺へ案内する。清三は大きな池のある広場に連れて来られた。ここが須磨寺だと康子は云った。池の水には白鳥が群をやって遊んでいた。雨がその上に静かに舞っていた。池を渡って、高い石段を登ると寺があった。>>小さい山門まで来ると、>>台石にふたりは座った。そして<<静かでしょう>>と云い、くしばらく眼を閉じてじっとしていたが、まもなく帰ろうと云いだした。康子は傘を広げようとしたが云った。

「あなた、生きている目的が分かりますか」「目的ですか」「生活の目的でなく、生きている目的よ」清三は康子の云う意味がわからなかった。

冷たい寒い日、頭痛で早急した。しきりに康子が恋しく思われる。やっと帰りに青木が留守番をしていて、康子は夫の上役の家に行っているとか聞いていなかった。青木は電話を見せてくれる。「正月に帰る」と読み取れた。清三はさすがに驚か、頭痛と電報が気になって眠れなかった。ふと目覚めると、鼻先に康子の顔があった。<<康子が顔を引くのはほとんど同時に、清三の手が本能的に康子の膝に伸びていった。康子はその手をしっかりと握った。そして程なく「我慢なさい」と言って膝下に下りていった。

また雨の日、清三は康子に新聞地の松竹座に呼び出される。しかし、夫の上役と同席の意味に苦しみ、また期待してきた恋心を虚しく潰した康子のつれない素振りに怒って帰る。

四、五日後ふたりきりの夕食のとき、康子は清三に須磨寺前に住む下宿先を見つけておいた、という。込み上げてくる感情に耐えられず二階へ上がった清三は追って来た康子と唇を合わせた。そして<<来月の船で亜米利加へ行きますよ>>と康子は言った。<<康子の熱い呼吸が清三の顔に近づいた。「我慢なさい」そう云って康子は膝下へ下った>>朝起きると雨だった。清三は恋の終業を悟った。清三の気持ち映すように雨の中に須磨寺や鉄扇山の峰が寒くかすんだ。

<<生きている目的が分かるか>>清三は朱い山門の下で云った康子の言葉を思い出していた

<>内【花杖記】(新潮文庫収録)の原文より。監修・野元正

須磨離宮公園・須磨離宮植物園

旧武庫離宮跡を利用した須磨離宮公園は、洋風の噴水広場を中心とした本園と、約300種、80,000株の植物が植えられた植物園からなります。噴水広場には旧武庫離宮の歴史に由来して、「王侯貴族とバラ」をテーマに約60品種をコレクションした神戸随一のバラ園があります。また、園内ではハナショウブや紅葉や園など四季折々の花が楽しめます。見頃には各種イベントが開催されます。



入園料金/大人400円、小中学生200円  
営業時間/9:00~17:00(4/29~8/31)  
の土・日・祝日は~20:00)  
木曜休(祝日は開園、翌日休)  
お問合せ/(078) 732-6688



プリンセスド・モナコ(故グレース王妃を記念)



ハナショウブ

網敷天満宮

菅原道真が九州へ向かう途中、風雨を避けて立ち寄った際、土地の漁師が漁に使う大綱を巻円座を作り、道真をもてなしたという故事がこの天満宮の由来です。1月の「初天神」、12月の「終天神」のほか、境内の梅が見ごろになる2月に「梅祭り」が開催されます。お問合せ/(078) 734-0640



菅原道真公の像と通関の梅



網敷天満宮奉賛歌  
竹中郁

竹中郁歌碑



